

## 2 中高連携授業変革の歩み

### (2) 岐阜県立中津商業高等学校における実践

#### <授業実践>

##### 授業実践に向けての構え

聞くこと、話すことを重点においた、実践的コミュニケーション能力を育てる指導の在り方を研究テーマとし、授業実践に取り組んだ。

昨年度は、場面が設定されている状況での対話表現の修得ができた。今年度はそれを発展させるため、情報を受け取るために必要な「聞く力」、情報を送るために必要な「話す力」のうち、「話す力」のレベルを、自分の考えや思いを伝える段階まで引き伸ばすことを目標に掲げた。1年生国際経済科の「OCA」における少人数授業、又その評価のあり方の面において、改革に取り組んだ。

#### 第1回授業交流研究会

【日時】 平成14年7月1日(月)

##### 【公開授業】

- ・ 単元名 Hello there Oral Communication A Lesson5 「How about going to the movies?」
- ・ 授業学校/学級 岐阜県立中津商業高等学校 1年生国際経済科  
指導者：安田教諭/原教諭/森尾教諭/沼波教諭
- ・ 1学級40人のクラスを4分割し、それぞれのグループに1人の英語科教諭が教科担当となり、少人数制授業を展開している。4回の授業に一度ずつ、AETとのチームティーチング授業を実施し、リスニング力・スピーキング力の養成に重点を置いている。国際経済科には、英語で自己表現することに意欲のある生徒が多く、少人数制によって生じる表現する機会の増加で、より一層積極的に授業に参加している。

##### 【授業研究会】

- ・ 国際経済科は、1年時に「英語」4単位、「オーラルコミュニケーションA」2単位、「LL演習」2単位と、英語の総授業数が多い。さらに、「オーラルコミュニケーションA」においてはグループレッスンが展開されており、各生徒と深く関わることができ、コミュニケーション能力の育成には恵まれた環境であるということが指摘された。
- ・ また、その評価の在り方について、中学校側から質問があった。定期テストにおいて、筆記形式ではなく、1人10分程度の個人面談方式によって評価している。言語の使用場面を設定し、生徒が実際に情報の受け手や送り手となってコミュニケーションを行うことによって、実践的コミュニケーション能力がどれだけ養われたかを測るものである。これによって、授業中の実践的な活動により意欲を示し、積極的に情報や相手の意向などの理解に努め、自分の考えなどを表現しようとする生徒の姿がみられるようになっている。このテスト形式を踏まえ、中学校側でも同じような評価方法を取り入れたいとの意見があった。

#### 第2回授業交流研究会

【日時】 平成14年11月12日(火)

##### 【公開授業】

- ・ 単元名 英語実務 「商談開始 Price List の作成」
- ・ 岐阜県立中津商業高等学校 3年国際経済科(自己選択による科目別少人数学級14名)

指導者：今井教諭/森尾教諭

- ・商業科の科目であるが、コンピューターを使って、ビジネス英語を学ぶ科目である。商業科目の分野において、英語科の教諭が英語表現の説明等をサポートする形のチームティーチングを実施している。

#### 【授業研究会】

- ・「英語実務」という商業科目の指導目標は、英語を通してビジネスの国際化に関する知識と、外国人とのコミュニケーションに関する知識と技術を習得させ、国際理解の重要性について理解させることである。それとともに、実用的な英会話を身に付け、国際的なビジネスの諸活動に役立てることのできる実践能力と態度を育てることにある。本時では、ワードやエクセルを用い、英語で価格票を作成し、パソコンを通じて課題の提出をするなど、情報化のニーズに即した指導を試みている。
- ・外国語の新学習指導要領の目標を踏まえて、実践的なコミュニケーションの育成を目指す授業を参観したことにより、英語を学ぶのではなく、他教科を英語で学ぶという新しい視点について知ることができた。

#### <グローバル・スタンダードによる英語診断>

- ・2年生国際経済科の40名がTOEFL-ITPを受験した。この40名の受験者は、昨年度のTOEFL-ITPも受験しており、今回で二度目の受験であった。
- ・三修社の「TOEFL攻略450点」を用いて、週一度の小テストを行い、語彙力の強化に努めた。
- ・昨年度より、50点以上もスコアアップした生徒も複数いた。

#### <イマージョン・プログラム>

- ・昨年度は、海外研修の事前研修を兼ね、外部講師による授業を実践した。ニュージーランドの地理や文化などについて、ネイティブスピーカーによってオールイングリッシュでゲームやクイズ形式で学ぶものであった。
- ・今年度は、日常会話だけに終わらず、相手の意見を聞き取ることができ、その流れの中で自分の考えや思いを伝える表現力を養うことを目的とした。

#### 第1回 平成14年9月9日(月)

対象生徒 (1年生国際経済科40名 / 2年生国際経済科40名)

- ・他校のAET4人のゲームによる自己紹介  
それぞれが簡単にスピーチをし、その内容をQ&Aで確認した。質問の難易度に応じて、点数化されており、チーム制で行うことで、クラス全体を巻き込んで盛況に終わった。

#### 第2回 平成14年10月7日(月)

対象生徒 (1年生国際経済科40名 / 2年生国際経済科40名)

テーマ：“School uniform is better than free wear.”  
“Senior high school shouldn't have entrance exam.”  
“Japan is a good country.”  
“Summer vacation is more fruitful than winter vacation.”

- ・4人のAETがそれぞれのテーマを設定



それぞれ10人の4つのグループを作った。各グループに1人のAETが加わり、テーマについて意見を交換し合った。

- ・一つのテーマに10分程度時間をかけ、AETを入れ替えることによって、4つのテーマすべてについて話し合うことができた。

### 第3回 平成14年11月11日(月)

対象生徒 (1年生国際経済科40名 / 2年生国際経済科40名)

テーマ: “Boy should pay for dates.”

“High school should also have school lunch.”

- ・チームディスカッションで、テーマごとに賛成派と反対派を作った。
- ・各グループで意見を出し合い、箇条書きで筆記させた。
- ・それぞれのグループがその意見を発表した後で、再びグループディスカッションの時間を設け、相手グループへの反論、及び自分たちの意見を練り直し、発表した。その発表を聞いていた生徒による拍手の大きさに、それぞれのグループの勝ち負けを判定した。



### 第4回 平成14年12月9日(月)

対象生徒 (1年生国際経済科40名 / 2年生国際経済科40名)

テーマ: “High School shouldn't have club activities.”

- ・テーマに対して反対か賛成かを生徒に問い、それによってグループを作る。賛成派グループ反対派グループ、それぞれの中で意見を出し合う。



以上、4人の外部講師による授業を合計4回行った。初めのうちは慣れないせいもあり緊張した面持ちだった生徒達が、回を重ねるごとにリラックスしたムードが生まれ、積極的に自分の意見を言う場面が見られた。以下に生徒の感想をまとめた。

- ・テーマは結構難しかったけど、考えて、それを英語で表現するのは、楽しくて勉強になった。他の子の意見を聞いて、自分はもっと勉強しなければならないと思った。
  - ・話すことが楽しかった。でも、色々な質問をされた時、どう答えていいのか分かったから、もっと勉強したい。
  - ・完璧な英語ではなかったけれど、楽しく話すことができて良かった、もっと沢山話せるようになりたいと思った。
  - ・英語を聞いて理解するのは大変だったけど、楽しかった。
  - ・どうすれば相手に伝わるか考えて話せて、良かった。
  - ・生の英語が聞けたし、みんなの意見を必死で分かろうと聞けて良かった。
- などという意見が多く、英語を聴き取り、理解し、その状況の中で自分を表現する場を作ることができた。又、これをきっかけに、少しでも自分の中に英語を取り入れられた喜びを生徒自らが感じ、更なる向上心を生むことにもつながったと言える。

### <成果と課題>

- ・今回のように学校単位で、中学校・高校が連携して授業変革に取り組んだことは初めての試みであり、試行錯誤を繰り返しながら、既存の授業から脱却し、より効果的な授業方法を模索する意識が教師の中に生じた。
- ・このイマージョンプログラムを通して、この2年間で10回以上に及び、様々な国のネイブスピ

ーカーと身近に接したことは、生徒にとって貴重な体験であった。自分の意見を述べ、他と交流できた喜びが生徒の中に生まれた。ネイティブスピーカーと、自然な状況で、英語に触れる機会を作り出すことができた。授業後に行ったアンケートによると、ほとんどの生徒がこの機会を楽しんでおり、次の機会を楽しみにする生徒も多くみられた。

- ・ 今後は、教科書の文章からテーマを見付け出しディスカッションのテーマとし、人の意見を聞き、自分の考えを話す場を、授業に多く作っていきたいと考えている。まずは回を重ね慣れることが大切であり、継続によって力が育まれると考える。